



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4292 号 2018.3.31 発行

通天閣、東京タワー、京都タワー…全国の名所が青に染まるー「発達障害に理解を」母の思い広がれ、4・2「自閉症啓発デー」産経新聞 2018年3月30日「世界自閉症啓発デーで通天閣が青色にライトアップ」世界自閉症啓発デーのPRのため青色にライトアップされた通天閣=平成24年4月2日、大阪市浪速区

発達障害の一種である自閉症への理解を広めようと4月2日の「世界自閉症啓発デー」に合わせ、世界各地の名所がシンボルカラーの青色にライトアップされる。今年は約170の国と地域で行われる「ライト・イット・アップ・ブルー」というイベントで、日本では兵庫県芦屋市のNPO法人が平成23年に神戸で始めた。今年も東京タワーや通天閣、大阪城など全国180カ所以上のランドマークが青に染まる。



NYが発祥 今年是世界1

70カ国・地域で世界自閉症啓発デーは2007年に国連が決定した。ランドマ

ライトアップを予定している国内の主な施設

- ⇒ さっぽろテレビ塔(札幌市)
- ⇒ 東京タワー(東京都港区)
- ⇒ 名古屋テレビ塔(名古屋)
- ⇒ 京都タワー(京都府)
- ⇒ 通天閣(大阪市)
- ⇒ 大阪城(同)
- ⇒ 太陽の塔(大阪府吹田市)
- ⇒ 神戸ポートタワー(神戸市)



ークを「癒やし」や「希望」を意味する青色にライトアップすることで自閉症などの発達障害への理解を呼びかける活動が翌年、米ニューヨークでスタート。

10年に地元の自閉症支援団体が世界に呼び掛けたのをきっかけに広まり、エンパイアステートビルディング(米)やシドニー・オペラハウス(豪)、ピラミッド(エジプト)など、今年は約170の国と地域で行われる。

国内では180カ所

日本でこの活動を広めたのは自閉症のある子供の母親らでつくるNPO法人「あっとオーティズム」(芦屋市)だ。オーティズムとは、英語で自閉症を意味する。理事長を務める佐伯比呂美さん(53)は11(平成23)年1月、この活動をインターネットで知り、「日本でも広めたい」と、主催するニューヨークの支援団体に連絡。4月、神戸ポートタワーなど兵庫県内3カ所で始めた。

最初は各地のランドマーク施設などを一つずつ回り、趣旨を説明しながら協力を要請。賛同者が各地でライトアップイベントを主催するようになり、今年は北海道から沖縄まで180カ所以上が青色に染まる。

「お先真っ暗」だったが…奇跡的な成長遂げ大学生に

厚生労働省によると、自閉症には言葉の発達の遅れや、コミュニケーションや対人関係の障害、パターン化した行動といった特性がある。佐伯さんの長男(18)も自閉症だ。特に幼少期は子育てが大変だったという。視線が合わず、手もつなげない。名前を呼んで

も振り向かず、手をひらひらさせて楽しそうに跳びはねるだけ。言葉も小学5年生まではほとんど話せず、「お先真っ暗だった」と振り返る。

そんな中、救いになったのが保育士や教師らとの出会だった。適切な時期に適切な支援を受けた結果、奇跡的な成長を遂げ、4月からは大学1年生だ。

ただ、社会全体の発達障害への理解はまだ低い。佐伯さんは「発達障害のある子供には個々に合った適切な対応が必要で、不登校やひきこもりといった二次障害を防げる」と指摘。そのためにも社会の理解が不可欠だとして、今後も活動を続けていくつもりだ。「周囲が発達障害の特性を理解することが子供たちの可能性を伸ばす力になる。発達障害児を見守る意識が社会に広がるきっかけとなれば」と話している。

発達障害 自閉症や学習障害（LD）、注意欠陥・多動性障害（ADHD）などの総称。生まれつきの脳機能障害が原因とされる。他人の気持ちを読み取れなかったり、物事を計画的に進められなかったりすることがある。人によって特性は異なり、音や光などに対する感覚過敏を伴うことも多い。幼少期に症状が現れるが、大人になってから診断されるケースもある。平成24年の文部科学省の調査によると、発達障害は小中学生の6・5%に可能性があるという

城みさをさん偲ぶ会 さをり織り創始者 織りなす功績、個性とりどり

毎日新聞 2018年3月30日



城みさをさんの遺影の前で、参列者がそれぞれ自慢の「さをり織り」を着てファッションショーをした＝大阪府和泉市の和泉シティプラザで、御園生枝里撮影

今年1月に老衰のため104歳で亡くなった、さをり織り創始者、城みさをさんを偲（しの）ぶ会が24日、大阪府和泉市の和泉シティプラザであった。約380人がさをり織りで作った作品を身に着けて参列。ファッションショーをして、功績をたたえた。

城さんは堺市生まれ。3人の息子が結婚した後、織物を始めた。糸が1本抜けてしまったのを傷ではなく「模様」と捉え、自由に織った。個性あふれる作品を見た三男の研三さん（74）に「世に問うてみるべきだ」とアドバイスされ、大阪の老舗呉服店にショールを持って行くと高値で売れた。57歳の時に自分の感じる

ままに「感力」で織る「さをり織り」を創りあげた。国内だけでなく、世界50カ国以上に広まった。

偲ぶ会では織物体験や織機の製造販売をする「さをりの森」（和泉市）代表でもある研三さんが「彼女の功績の大きさを改めて感じる」とあいさつ。城さんが出演したテレビ番組などをまとめた映像で足跡をたどった。

会の最後に、参列者が供えた布を一つの作品として完成させた＝大阪府和泉市の和泉シティプラザで、御園生枝里撮影



親交の深い4人が追悼の言葉を述べた。東京都杉並区で教室を開く、島津美智子さん（75）はデパートで城さんの講演を偶然聞いた時に気さくに声をかけてくれたエピソードを紹介。アメリカで工房を主宰する若林美穂子さん（49）は海外では文化の違いから、理念を伝えるのが難しく、工夫して広めてきたと振り返り、「さをりの本質を丁寧に伝えていきたい」と決意を新たにした。

参列者は30センチ四方の布を織って持参し、遺影の前に供えた。最後には全員の布をつなぎ、一つの作品として掲げた。ファッションショーも開かれ、ワンピースやベスト、

ショーなどをもとめた参列者がランウエーを歩き、モデルのような振る舞いで笑いを誘った。

さをり織りは障害のある人が利用する事業所などでも広まっている。和泉市の舛井美紀さん（43）はダウン症で、母親とさをり織りを始めた。舛井さんは「自分の好きに織っているだけ。楽しい。友達もできた」と話していた。【御園生枝里】

劣悪給食提供、姫路の「わんずまご一保育園」が廃園 産経新聞 2018年3月30日 「わんずまご一保育園」で今年2月23日、2歳児に出された給食（姫路市提供）



劣悪な給食の提供や定員を超過した園児の受け入れなどでこども園の認定を取り消され、休園していた兵庫県姫路市の「わんずまご一保育園」が、市に認可外保育施設の廃止届を提出し、受理されていたことが30日、分かった。

市によると、今月6日に元園長の代理人弁護士が昨年12月31日付での廃止届を市監査指導課に提出した。理由については言及されていなかったという。

同園をめぐっては、昨年2月に県と市の特別監査で同園の不適切な保育実態が発覚。県から昨年4月1日付で認定を取り消されて認可外保育施設となり、休園していた。

市は、同園が保育士数の水増しなどで給付金を不正受給していたとして計約4700万円の返還を請求。同園は全額を返還したが、市は詐欺罪での刑事告訴を検討している。

病児保育、全県どこでも利用OK 山梨で4月から 中沢滋人

朝日新聞 2018年3月30日

病気で保育所などに通えない子どもを一時的に預かる「病児・病後児保育施設」。山梨県内では4月から、どこに住んでいても、どの施設でも利用できるようになる。後藤斎知事が29日の定例記者会見で明らかにした。県子育て支援課によると、県全域で広域利用できる取り組みは全国でも初めてという。

こうした施設は医療機関や保育所に併設され、現在は県内14市町に15施設ある。うち5施設は、回復しているものの感染症などの理由で登園できない子だけを預かる「病後児対応型」となっている。

これまで、施設を設置する市町村が原則として在住・在勤者などに利用を限っていた。予約でいっぱいな場合、利用をあきらめるケースもあったという。小規模な自治体では費用などの面から、独自に設置することが難しかった。

定年後の再雇用、賃金75%減は違法 高裁判決が確定 朝日新聞 2018年3月30日

北九州市の食品会社が定年を迎える社員に、再雇用（継続雇用）の条件として賃金を25%相当に減らす提案をしたのは不法行為にあたるとして、会社に慰謝料100万円の支払いを命じた福岡高裁の判決が確定した。佐藤明裁判長は再雇用について「定年前後の労働条件の継続性・連続性が一定程度確保されることが原則」との判断を示した。

判決は昨年9月7日付。原告、会社双方が上告したが、最高裁が3月1日にいずれも不受理の決定をして確定した。原告代理人の安元隆治弁護士らによると、再雇用後の賃金引き下げを不法行為とした判決が確定したのは初とみられる。再雇用をめぐる企業の実務に影響しそうだ。

判決によると、原告は食品の加工・販売を手がける九州惣菜（そうざい、北九州市門司区）に2015年まで40年余り正社員として勤めた。定年時は経理を担当し、月給は約

33万円だった。同社は、再雇用後は時給制のパート勤務とし、月給換算で定年前の25%相当まで給与を減額する条件を示したが、原告は拒んだ。

高裁判決は、65歳までの雇用の確保を企業に義務づけた高年齢者雇用安定法の趣旨に沿えば、定年前と再雇用後の労働条件に「不合理な相違が生じることは許されない」と指摘。同社が示した再雇用の労働条件は「生活を維持できないほどで高年法の趣旨に反し、違法」と認めた。

一方で、原告と会社が再雇用の合意に至らなかったことから、定年後の従業員としての地位確認や、逸失利益の賠償請求は退けた。

一審・福岡地裁小倉支部は原告の請求をいずれも退け、原告が控訴していた。(村上英樹)

旧優生保護法を問う 「調査基準を国が示して」知事 / 埼玉

毎日新聞 2018年3月30日

上田清司知事は29日の記者会見で、旧優生保護法に基づき障害者らに強制的な不妊手術が行われた問題について、国が調査の基準を示すべきだとの考えを示した。

県に残っている資料は一部を除き名前や当時の年齢しかなく手術を受けた人の特定ができないという。上田知事は「国が(調査の)基準を示し、各都道府県に照会依頼をする形をとらないと実態解明できないのではないか」と述べた。情報公開での資料の開示範囲についても国が基準を示すべきだとした。

旧厚生省の衛生年報などによると、県内では405人が手術を受けた。上田知事は強制不妊手術について「不愉快なことで許されることではない」とも述べた。【鈴木拓也】

旧優生保護法を問う 県審査会議事録開示 「遺伝の確認困難」 家族歴から判断多く 人権侵害述べる意見も / 群馬

毎日新聞 2018年3月30日

知的障害者や精神障害者らへの強制不妊手術を認めた旧優生保護法(1948~96年)に基づき、県内でも強制手術が行われていた。手術はどのような過程を経て実施されたのか。毎日新聞の情報公開請求に対し、県が開示した資料はほとんどが黒塗りで詳細は分からないが、手術の適否を判断する審査会の議事録からはわずかに審査過程の一端がうかがえる。【鈴木敦子】

強制不妊手術を巡る手続きは、まず、医師が診断書を添えて、県の優生保護審査会へ申請書を提出する。これを受け、審査会が開かれ、決定内容を関係者に通知する。

開示されたのは手術を受けた6人分の資料。優生保護審査会への申請書▽審査の同意書▽審査会の議事録・委員名簿▽健康診断書▽手術実施報告書―などで、県庁内に保管されていた。

書類の日付は72(昭和47)~79年。内訳は▽72年に1件▽73年に3件▽76年に1件▽79年に1件。

審査会の開催時間は1回約40分~1時間半。その日に結論が出ずに後日再び開かれたケースもあった。審査会の委員名簿は「県の衛生部長」以外は黒塗りになっている。「前橋家裁」「前橋地検」の記述があるが、それぞれの役職は黒く塗りつぶされている。一般的には裁判官や民生委員が含まれるとされる。

議事録は日付を含め黒塗り部分が目立つが、委員の発言のうち個人情報は一切含まれないものや、議事進行の県職員の発言は読み取れる。

例えば、73年の審査会。ある委員が、申請があった手術を認める根拠について、「遺伝の確認が難しい」ため「関係者の納得した12条を適用した方がよい」と発言している。旧優生保護法は、4条が医師の診断を根拠とするのに対し、12条は「保護義務者の同意」があれば認めていた。この委員は「私たちが証明できる遺伝性というのはわずか。家族歴から判断することが多い」と説明。4条での判断を避けて12条に誘導しようとする形跡

が見られた。

76年の審査会では、ある委員が「今までのケースは家族の意見がまとまっていたケースばかりでしたね」と発言している。この時の審査対象が、家族内で意見が割れているケースだったことがうかがえる。

法で認められていたとはいえ、73年の審査会では、「現実的には人権侵害の意味もあり問題」と慎重な意見を述べる委員もいた。70年代後半には申請件数は減っていったとみられ、79年の別の審査会では、県衛生部長が「最近はずっと申請がなく、一昨年9月以来」と発言していた。

保健事務所から19人分の資料も 県内25人に

今回開示された6人分の資料は県庁内で保管されていた。それとは別に、県は22日、19人分の資料が県内の保健福祉事務所から見つかったと発表した。これで25人分の資料が残っていたことになるが、旧厚生省の衛生年報などに記載された手術人数は21人となっており、県の担当者は「資料の中には、申請したが手術には至らなかったケースも含まれるのではないか」とみている。【鈴木敦子】

小さな星の懸け橋に

オリヒメがつなぐ／1 校内探検も「分身」で /鳥取 毎日新聞 2017年12月14日



手をたたいて喜ぶ加藤愛美さん＝鳥取県米子市で、小野まなみ撮影
「やったー」。愛らしい顔が、ぱっと明るくなった。

県立皆生養護学校小学部3年の加藤愛美（ことみ）さんは、自宅でタブレット端末を食い入るように見つめていた。画面の向こうから担任の先生の褒める声が届く度、小さな手をぱちぱちとたたいて喜んだ。タブレットに映し出されているのは、分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」が見ている皆生養護学校の校舎内の風景だ。オリヒメは、高さ21センチほどの上半身だけの小さな人型

ロボット。マイクやスピーカー、カメラを搭載し、離れた場所から端末で操ることで、景色を見たり音を聞いたりできる

オリヒメがつなぐ／2 つながり少しずつ /鳥取

毎日新聞 2017年12月23日

「皆生スポレク祭」で、他の児童らに交ざって競技に参加する加藤愛美さん（右から2人目）＝鳥取県米子市上福原7の県立皆生養護学校で、小野まなみ撮影



分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」を使うことになった一人、県立皆生養護学校小学部3年の加藤愛美（ことみ）さん（9）。生まれつき心臓の心室と心房が左右でほとんど分かれておらず、脾（ひ）臓がない「単心房単心室無脾症候群」を抱えている。危篤状態で生まれ、生後5カ月で最初の手術を経験。幼稚園や保育園には通えなかった。成長に伴い少しずつ体は丈夫になってきたが、まだ免疫力が弱く、感染症の恐れや体力への不安を抱える。

オリヒメがつなぐ／3 教育現場で効果検証 /鳥取

毎日新聞 2018年1月10日

2017年8月に開かれた、オリヒメを使った学習支援の効果検証委員会の初会合＝鳥取県米子市で、小野まなみ撮影



分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」は、東京都の「オリィ研究所」が開発。病
気や障害、けがなどで学校や会社に行けない人が、自宅や病室から操作して外部の人とコ
ミュニケーションを取るのに使われている。声が出なかったり体が動かせなかったりする
場合でも、視線で選択した文字を読み上げるソフトウェア「オリヒメアイ」で会話が可能
になる。教育現場ではこれまでに、鳥取を除く国内外計7校で使われている。



オリヒメがつなぐ／4 もっと、笑顔のために /鳥取

毎日新聞 2018年1月25日

「オリヒメを、子どもたちと社会をつなぐ一つの手段にしたい」と話す、導入に
携わった「つなぐプロジェクト」代表の今川由紀子さん＝鳥取県米子市で、小野
まなみ撮影

「外出が難しい子どもたちにも、オリヒメによって『学校』という
社会に参加してもらいたい」分身ロボット「OriHime（オリヒ
メ）」をレンタルした米子市の民間団体「つなぐプロジェクト」で代表
を務める今川由紀子さん（42）は、そんな願いを込めて取り組みを

続ける。今川さんは2017年春まで鳥取大医学部付属病院に勤務。

オリヒメがつなぐ／5 運用支える先生たち /鳥取

毎日新聞 2018年2月10日

加藤愛美さん（手前）がタブレット端末を操作する様子を見守る赤坂緑教諭＝鳥取県米子市上福原7の県立皆生養護学校で、小野まなみ撮影

県立皆生養護学校の先生たちは、小学部3年の加藤愛美（こ
とみ）さん（9）をいつも近くで見守ってきた。多くて週1回
の登校以外は、自宅で訪問教育を受けている愛美さん。担任の
赤坂緑教諭（59）は週3回のうち2回を受け持ち、ひらがな
や数字を教えるが、「周りの子が言った言葉をまねするほうが吸
収が早いんです」と苦笑いを見せる。



オリヒメがつなぐ／6 娘の成長、見守り続け /鳥取 毎日新聞 2018年3月7日

満ち欠けを繰り返す月を、病院の玄関からいつも二人で見つめる。傍らにいる我が子に
「いつ出られるかな」と語りかけるのが日課になっていた。

生まれつき心臓の持病を抱える県立皆生養護学校（米子市）小学部3年の加藤愛美（こ
とみ）さん（9）に、母玲子さん（42）は寄り添い続けてきた。生後5カ月の時から4、
5回の手術を繰り返した一人娘。入院に付き添い、病院に寝泊まりすることもあった。命
の危険が迫ったり、仲の良い子どもが亡くなるのを目の当たりにする中、「絶対に家に帰る」
と信じて過ごした。

愛美さんは3歳の冬に退院。以降、大きな手術や入院は避けられているが、今も鼻に酸
素を送るチューブを付け、口にする水分や尿の量の記録、体温や服薬の管理などは欠かせ
ない。同じ年ごろの女兒より小柄で、幼稚園や学校に行けなかった分、勉強のスピードも
ゆっくりだ。それでも少しずつ体は丈夫になり、できることも増えている。「ささいな積み
重ねを繰り返しているんです」と玲子さんは言う。

今は多くて週1回、午前中だけ登校する愛美さん。自宅で一緒に過ごしていると、玲子
さんは「学校に行けたらどれだけ刺激になるだろう」とも考える。そんな中で使用が決ま
った、分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」。周囲とのコミュニケーションを増や
して、娘が成長するきっかけになればいいと期待する。

2017年9月下旬。授業での導入前に操作に慣れるため、登校時に初めてオリヒメと

対面した。「やったー」「ばんざい」と口にしながら、夢中になってタブレットを操る愛美さん。玲子さんはそんな愛娘の様子を見ながら「ここまでたどり着けたことが幸せ。今日は寝る前に、『楽しかった』って言うんでしょうね」と目を細めた。【小野まなみ】

オリヒメがつなぐ／7 行事も歌も皆と一緒 /鳥取 毎日新聞 2018年3月28日



児童らに交じるオリヒメ。加藤愛美さんが操作していることが分かるよう、顔写真付きで名前の書かれた紙も張られた＝鳥取県米子市上福原7の県立皆生養護学校で、小野まなみ撮影

2月下旬、県立皆生養護学校小学部3年の加藤愛美（ことみ）さん（9）は、およそ3カ月ぶりに分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」を使った。この日は、小学部6年生の卒業を祝う「卒業おめでとうの会」。巣立っていく先輩たちを囲む在校生の輪の中に、愛美さんが操作するオリヒメもいた。

台車の上に置かれた机から辺りを見回すオリヒメ。車椅子を使う愛美さんが、普段と同じ目線で参加できるようにと、先生たちが考えたアイデアだ。自宅の愛美さんと通信中であることを知らせる顔写真入りの紙も張られ、それを見た子ども達も笑顔でオリヒメに向かって手を振った。

昨年11月、初めて授業で使用した時、映像とともに流れる人の声に雑音が交じり、愛美さんは途中で疲れた表情を見せていた。だが、この日は最後まで楽しんで参加。前日の訪問教育で練習した歌もみんなと一緒に歌い、仲の良い同級生の男児を見つけると、しきりに名前を呼ぶ愛らしい一面も見せた。会を終えた愛美さんは「頑張ったです」「楽しかった」と声を弾ませた。

これまで学校行事にはほとんど参加できず、せっかく練習した歌も本番で披露できなかった。オリヒメの利用でこうしたさみしさが薄れた、卒業おめでとうの会。「どこまで本人に理解できたか分からないけれど」。母玲子さん（42）は、笑いながら言葉を続けた。「それでも、まず経験して、何のために歌の練習をしていたのか少しは分かって良かった。刺激を受けられた」

冬は特に体調を崩しやすく、外出の機会が減ってしまう愛美さん。今冬は休まず登校日に通えているものの、学校に行ける日は限られる。分身であるオリヒメを使う回数を増やし、もっと学校の様子が分かるようにできないか。先生たちの模索は続くが、壁があるのも事実だ。

「外とつながっていると、受ける刺激が違う。普段の訪問教育ではできないこともできる」。オリヒメを担当する勝田浩司先生（40）は確かな手応えを感じている。一方で、難しさも実感する。児童らの学習の目標やカリキュラムは年度ごとに作成するため、夏に導入されたオリヒメを日ごろの授業などに組み込むことは困難だ。また、オリヒメを使う時は自宅と学校に最低1人ずつ先生が必要になる。屋外では、音声や画像の明瞭さも環境に左右されてしまうこともある。

オリヒメは愛美さんをはじめ、使う子どもたちが本当に学校にいるように感じられるための手段。ただ使うことだけが目標ではない。勝田先生は「いつもオリヒメがいることが、当たり前学校の風景になればいい」と力を込める。小さな分身ロボットの向こうには、学校に通えなくても、友達や先生と過ごすのを楽しみにしている教え子がいるのだから。先生たちの試行錯誤が続いている。【小野まなみ】

小さな星の懸け橋に オリヒメがつなぐ／8止 関わり合い理解深める /鳥取

毎日新聞 2018年3月30日

オリヒメをタブレット端末で操作しながら終業式に臨む加藤愛美さん（右）＝鳥取県米子市で、小野まなみ撮影

「これから、終業式を始めます」

3月20日、県立皆生養護学校（米子市）の修了式より一足早く、小学部3年の加藤愛美（ことみ）さん（9）たちの「終業式」が開かれた。愛美さんは自宅でタブレット端末を使い、学校の教室に置かれた分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」を操作。画面の向こうにいる先生が号令をかけると、もう一人の出席者である同級生の男児と2人の式が始まった。

愛美さんは、訪問教育に訪れた担任の赤坂緑先生（59）と画面を見つめた。1年間で頑張ったことを発表し合う場面では少し悩んだ後、「数の勉強を頑張りました」と恥ずかしそうに一言。男児に「（4年生になっても）仲良くしてください」と話しかけた。校歌を一緒に歌い、「終業式」は終わり。その後授業をし、最後に



赤坂先生から修了証を受け取ると、愛美さんの顔に笑みが浮かんだ。

修了証を見つめる加藤愛美さん＝鳥取県米子市で、小野まなみ撮影

「これまででは先生と2人だけだったから」。「終業式」を終え、「楽しかった」と話す愛美さんを見て母玲子さん（42）はそう話す。友達とともに1年を締めくくれたことは、愛美さんにとって大きな意味がある。

2017年度、オリヒメで授業や行事に参加できたのは4回。回数は少なかったが、オリヒメを通して得た記憶や経験はいつか、自信や思い出になっていく。玲子さんは「なじみの学校で友達と『今』を体験して、一つ一つの出来事が自分の中でつながり、理解していくことが大事なんです」と語る。

愛美さんの「終業式」と同じ日、17年度最終回の効果検証委員会が米子市であった。半年間、オリヒメを試験的に使用した皆生養護学校と県立鳥取養護学校、米子市立就将小学校での実績が報告された。

タブレット端末を使って自分で操作することで、活動に積極的に参加できるようになったり、発達や成長面での刺激になったりしたなど、どの学校でも一定の効果が上がった。就将小では、鳥取大医学部附属病院の院内学級に通う子どもに対し、通常学級の子もたちが理解を深めることもできたという。反面、機器の持ち運びや通信といった、日常的に使うための環境整備などに課題も見えた。

オリヒメは18年度も引き続き日本財団の助成を受け、県内で使われることが決まっている。今年度の倍の計6台が、子どもたちと社会をつないでいく。年度当初からの使用でカリキュラムも組みやすく、これまでより多様な場面での活躍が期待できる。皆生養護学校では早速、市立米子養護学校の移管でできる分校とをつないだ交流も検討。導入に携わる民間団体「つなぐプロジェクト」や県教委などは課題改善のほか、県や市に対する19年度予算要求に向けて動き始めている。

障害や病気と向き合う子どもたちが、もっと社会と関わられるように。支援に携わる人々の思いが込められたオリヒメを使って、「1人でも多くの子どもの学習環境を整えられるよう、サポートしていきたい」と、つなぐプロジェクト代表の今川由紀子さん（42）は話す。そして、「一つ一つ効果を上げていく。オリヒメが教育現場に必要だと知ってもらい、全国に広まってほしい」と力を込めた。【小野まなみ】



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんペクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行